

桧垣説話と『桧垣姫集』

— 伝承の史実性と家集の成立について —

妹 尾 好 信

はじめに

桧垣姫は『後撰集』雑三に一首を載せる歌人であるが、その出自・身分等、伝記には不明な点極めて多い。その家集とされる『桧垣姫集』があるが、本文に難解な箇所が多いのはもとより、編者や成立事情に関しても多くの問題を含む歌集である。また、『後撰集』の一首は『大和物語』第一二六段に採られ、家集にも載るが、詠歌事情や歌句にそれぞれ異同があつて、長く論議の的となつてきた。本稿は、先学の学恩に負いつつ、『後撰集』・『大和物語』の桧垣説話と『桧垣姫集』の成立に関していささかなる卑見を述べようとするものである。

一、『後撰集』と『大和物語』の伝え

まず、『後撰集』と『大和物語』に共通して載せられた桧垣説話から検討を始めよう。両者の伝えを掲げる。(註)

○『後撰集』卷一七・雑三・一二一九

つくしのしらかはといふ所にすみ侍けるに、大貳藤原おき興紀のりの朝臣の、まかりわたるついでに、水たべむとてうちよりてこひ侍ければ、水をもていでよみ侍ける

年ふればわがくるかみもしら河のみづはぐむまで老にけるかな
かしこに名たかく事このむ女になん侍ける
ひがきの眞前 信

○『大和物語』第一二六段

筑紫にありける桧垣の御といひけるは、いとらうありおかしくて、世を経ける物になむありける。歳月かくてありわたりけるを、純友が騒ぎにあひて、家も焼けほろび物の具もみなとられはてて、いとみじうなりにけり。かゝりともしらで、野大式好古討手の使にくだり給て、それが家のありしわたりをたづねて、「桧垣の御といひけむ人に、いかであはむ。いづくにかすむらむ」とのたまへば、「このわたりになんすみ侍りし」など供なる人もいひけり。「あはれ、かゝるさはぎにいかゞなりにけむ、たづねてしかな」とのたまひけるほどに、頭白き女の水汲めるなむ、前よりあやしきやうなる家にいりける。ある人ありて「これなむ桧垣の御」といひけり。いみじうあはれがり給てよばすれど、恥ぢて来でかくなむいへりける
むばたまのわが黒髪はしらかはのみつはくむまでなりにけるかな

とよみたりければ、あはれがりて、きたりける袖一襲ぬぎてなむやりける。

比較してみても、かなりの相異点があることがわかる。まず、歌句に若干の異同がある。詠者名も『後撰集』では「桧垣の疆」とあるのに対し、『大和物語』では「桧垣の御」とある。

また、詠歌事情については、この桧垣と出会った人物が『後撰集』では藤原興範であり、大宰大式在任中に桧垣の住む白河のあたりを訪れた時のこととしている。ところが、『大和物語』では野大式小野好古となっており、純友の乱平定のため追討使として九州に下向した時のことだと言う。興範が大宰大式であったのは延喜二年（九〇二）正月から同七年（九〇七）二月までの間と、同一年（九一一）四月から同一年（九一六）正月までの間の二度である（『公卿補任』）。そして好古が山陽道追捕使となったのは天慶三年（九四〇）正月一日であり（『日本紀略』）、同年八月二十七日には追捕山陽南海両道凶賊使に定められている（大日本史料所引『師守記』）。『後撰集』の伝えを信ずるならば、この事件は延喜初年から十年代前半のこととなり、『大和物語』の方を正しいとするならば天慶年間のこととなる。両者の間には年代的に二五年から四〇年程度の隔たりがあることになる。

これだけではどちらの伝えが正しいとも判断しかねる。岸上慎二氏は「勅撰集であるといふ点に信憑性を認め、後撰集に従っておくのが至当であろう」とされた。また、山口博氏は「大和物語にくらべると多数の人々の手によってなつたと考えられる後撰集の説を尊重すべきではないか」と、岸上氏とは別の観点から『後撰集』の信憑性を支持された。今井源衛氏も「大和と後撰の関係についてのみ

云えば、強いて史実如何をいうならば、どちらかといえば、後撰の興範説を信ずべきだとされる岸上説に随う外ないと思う」と、一応は岸上説によられたが、「しかし、実はその差も五十歩百歩であつて、より根本的にいえば、こうした説話は（中略）一つの類型として当時、かなり流布していたのではないかと考えられるのである」とされ、「その相手は、女の住む筑紫、肥後あたりの国の守であればよい」と述べられた。これに対し、柿本契氏は「実情は知り難いにしても、事実の正確さにおいて『後撰集』の伝えが本物語（筆者注、『大和物語』のこと）に優るとも言い得るデータが得られず、反対に本物語の方が安定して正確であると言ひ得るデータが幾つも見える事を思えば、本物語の伝えを軽視する事はできないであろう」と言われ、消極的ながら『大和物語』の伝えを支持された。また、目加田さくを氏は、後述する『桧垣疆集』の伝えをも参照された上で、「ここ（筆者注、桧垣の居所）を訪れたのは、野追討使でもなく、大式興範でもなく、或る肥後国守であると考えるのが妥当であろう」と、両者とも正しくないとされた。このように諸説紛紛としている状態なのである。

二、『後撰集』興範説の実際

こういう状況ではあるが、桧垣という女性の実像をより正確に捉えるためには、この両者の伝えの信憑性をやはりはっきりと判定しておく必要があると思う。『後撰集』は勅撰集であるからその伝えはすべて事実であるとは必ずしも言えないであろう。周知のごとく『後撰集』は当時の歌語り流行を反映して、巷間に流布していた歌語りを積極的に撰集資料として取り入れていると思われるから、

中には事実からは離れた噂話もあるであろう。しかし、この話の場合はどうであろう。その信憑性を判断する鍵は、ここに登場する藤原興範なる人物にあると思われる。

興範は宇合流六世の孫（『尊卑分脈』）で、因幡介従五位下正世の九男という（『公卿補任』）。延喜一七年（九一七）に七四歳で没している（同）から、仁明朝の承和一年（八四四）の誕生である。貞観一五年（八七三）春に三〇歳で文章生となっているが、彼は道真の管家学閥と並ぶ当時の二大学閥とされる大藏善行の門に学んだ教養人であったと言^{注7}う。『延喜格』編纂員の一人でもあった。

彼自身は勳擧歌人ではなく、詠歌も残していないが、孫に三十六歌仙に数えられた仲文がいる。仲文の歌人としての資質も祖父興範の文化人としての血をうけついでものと考えることもできる。彼の家系においては異例ともいふべき参議にまで昇進していることも、文人政治家興範の器量を示すものであろう。仲文にしてみれば祖父興範は極めて尊敬すべき父祖であったはずである。当然仲文は興範の事跡や彼に関する歌語りなどには注目していたものと思われる。

ところで、仲文は『後撰集』の撰者たちとは歌人仲間として親しかった。とりわけ元輔とは極めて親しい関係にあり、いくつも歌のやりとりを残している（『仲文集』二二―二三、『元輔集』一一―五四・一一七二）。また大中臣能宣とも贈答を交している（『拾遺集』五三五―五三六）。『後撰集』撰集の始まった天曆五年（九五二）現在、仲文は二九歳の若年であるが、当時冷泉天皇の春宮蔵人をつとめ、新進歌人として売り出し中の頃であったから、すでに撰者たちと交際があったと考えてもよいであろう。そういう仲文の祖父に関する逸話であってみれば、『後撰集』撰者たちも入集に際し

ては相応の配慮をしたであろうから、興範とする伝えはかなり信用してよいのではないかと思われる。興範の檢垣との交渉は、仲文としては誇るべき祖父の風流譚であったと思われるのである。

だから、興範は実際に檢垣と関わったのである。それは二度にわたる彼の大式在任いづれの時とも決し難いが、おそらくは、延喜一一年（九一一）四月再任の時ではないかと思われる。任地を巡廻している折の出来事らしいから、赴任直後のことであろう。『貞信公記抄』によると、同年九月二日に、興範の九州赴任に際しての饞別の宴が設けられているから、その直後に赴任したとして、この年の冬から翌年の春頃のことであろうか。ただ、もし興範が水を乞うたのは道中の暑さゆえと解するならば、翌年夏のことであるかも知れない。

さて、『後撰集』の詞書によると、巡廻中たまたま通りかかったついでに立ち寄って水を所望したということになっているが、興範はこの時、檢垣の居所だと知って立ち寄ったのであろうか。偶然水を所望した相手が実は檢垣であったのか、それとも旧知の檢垣のことを思い出して水の所望にかこつけて立ち寄ったのか。

『後撰集』はこの歌にわざわざ左注を付して「かしこに名たかく事このむ女になん侍ける」と言っているから、当時檢垣はかなりの有名人であったことがわかる。思うに興範は筑紫においては名高い風流女性であった檢垣と旧知の仲であったのではないか。彼は大式に任官する以前にも、何度も九州の地に赴任していたようである。『公卿補任』によると、貞観一九年（八七七）正月に大宰少監に任じたのを皮切りに、仁和三年（八八七）八月筑前守、寛平五年（八九三）正月豊前守、同年四月再び筑前守、八月には大宰権少式を兼

任、さらに七年（八九五）正月には少弐に転じるといふ具合に在九州の官を歴任する。筑前守藤原有恒の女を妻とした（『尊卑分脈』）のもおそらくは九州在任中の縁であろうから、興範は壮年期のかなりの部分を九州で過ごしている。檢垣はおそらく大宰府を中心とした筑紫文化圏の中で活躍していた女性であろうから、早くから興範が親しくする機会を持ったと考えるのはごく自然なことであろう。

寛平年間から延喜初年の頃、興範は大宰府の地で「名たかく事このむ女」檢垣と交際があった。それは恋愛関係というよりは風流人としての気楽な交際であったろう（檢垣が遊女であったか否かについては議論があるが、遊女説を否定する決定的な根拠はないので一応遊女であったと見ておきたい。なお注13参照）。『大和物語』第一二七段での檢垣の詠歌の場は「大弐の館」であるが、この時の大弐もあるいは延喜初年に赴任していた興範であったかも知れない。

ところが、興範は延喜七年（九〇七）二月、右京大夫となって九州を離れる（『公卿補任』^{（兼任）}）。そして四年後、再び大弐となり九州に戻った時、檢垣は白河の地に住んでいた（白河が大宰府にあったか肥後であったかは今はさておく）。そこを通りかかった興範が数年ぶりに再会したというのが『後撰集』の詞書に言う場面ではなからうか。興範は旧知の檢垣の住む家だということで水を乞いがてら立ち寄ったのであろう。

そこで檢垣は水を汲んできて歌を詠む。「年ふればわがくろかみもしら河のみづはぐむまで老にけるかな」。するとこれは多分に挨拶の意を含んだ歌である。「しばらくお会いしないうちに私はすっかりおばあちゃんになってしまいましたでしょ」と、自嘲めいたことを言いつつ懐しんでいるのであって、言葉通りに檢垣が老いさら

ばえていたと考えるのは間違ひであろう。もちろんこれは嘆老の歌などではないのである。この歌の眼目は、「白河」という地名と「水を汲む」という行為をうまく歌に詠みこむことにあつたのである。「白河」を白髪の意味に、また水を汲む行為を「みづはぐむ」と懸詞にしたた当意即妙の面白さを評価するべき歌であつて、本当に自分が「みづはぐむ」ほど老いさらばえているというわけではないのである。『後撰集』は作者名を「ひがきの軀」としているからいかにも老女らしいけれども、これは歌句によって撰者たちが思い込みで付した呼称か（『大和物語』では「檢垣の御」と呼んで軀とは言わない）、あるいは「年盛りの頃の遊君が軀であつたはずはない。思うに後撰集に歌が入つた頃遊君仲間（^{（若）}）で一応軀格であつたのであろうか」と言われる阿部俊子氏の言葉を参考とすべきであろう。繰り返すが、延喜一二年（九一二）頃、興範は九州白河の地で旧知の檢垣に数年ぶりに再会した。檢垣の歌はその時挨拶として詠まれた当意即妙の歌なのであつて、決して実際に彼女がみづはぐむ老女であつたわけではない。女盛りを過ぎた年齢になつたことを誇張して言つたままで、実際の年齢は三十代かせいぜい四〇歳くらいであつたと考えてさしつかえないのである。

三、『大和物語』好古説の背景

さて、『後撰集』の言う大弐興範と檢垣との交渉が史実として認められることになる。『大和物語』第一二六段の記す野大弐好古との交渉とする伝えはどういうことになるであろうか。興範がいつの間にか好古と誤認された付合の説とみなすべきであろうか。確かに歌語りというものは簡単にパリエーションを生むものである。好

古は純友の乱の平定者として功を成した、いわば時の人であったし、風流人としても知られていたから、歌語りの主人公としてはいかにふさわしい。興範の没後時がたつにつれていつの間にか好古がとって交わることもありそうである。しかし、ここでも、先に興範説を吟味したのと同様に、少し立ち止まって考えてみる必要があると思う。

好古が純友の乱平定のために追捕使長官として西国に下ったのは、前述の如く天慶三年（九四〇）八月のことである。反乱軍との戦いは、はじめ南海・山陽兩道を舞台とし、同年中は一進一退であったが、翌四年（九四一）五月には、純友の軍は筑紫に現れて財物を略奪し、大宰府を焼いた。『大和物語』の記す、檢垣が「純友が騒ぎにあひて、家も焼けほろび物の具もみなとられはてて、いとみじうな」ったというのはこの時のことであろう。好古は海陸から軍を進め、博多津で反乱軍と決戦し、壊滅に追い込んだ。敗れた純友は、伊予に逃れたが、六月二〇日、伊予國磐固使橋遠保によって斬首され、乱は平定した。^注好古は、同年八月七日に凱旋入京している（『日本紀略』『本朝世紀』）から、『大和物語』の伝える話が史実であるならば、好古が檢垣と会ったのは乱平定から入京までの間のことと考えられ、おそらくは天慶四年（九四一）七月中のことであろう。

さて、好古はその後順調に昇進し、凱旋直後の八月一八日に昇殿、翌五年（九四二）三月左中弁、二月備前守、同七年（九四四）山城守と歴任し、同八年（九四五）一〇月には大宰大式に任ずる。野大式の称が生まれたのはこの時以後のことである。天曆元年（九四七）四月には参議に任ずるが、同三年（九四九）まで大式は兼任

のままである。のち讃岐権守・備中権守・彈正大弼・左大弁等を兼任し、天徳四年（九六〇）四月、再び大宰大式を兼ねる。この時七七歳。応和二年（九六二）正月には従三位に叙せられた。康保元年（九六四）、八一歳で大式を離れ、同四年（九六七）七月、参議在任二年、八四歳で致仕。翌五年（九六八、安和元年）二月一四日卒（以上『公卿補任』）。

ここで注意しなければならないのは、『後撰集』が編まれた天曆五年（九五二）の頃、好古は健在であって、最初の大式の任は解かれていたから、参議として在京していたであろうことである。自詠も三首入集している『後撰集』を当然好古は見たであろう。もし自分に関する話が興範として出ていたら彼はクレームのひとつもつける筈である。というよりも、好古に関する話が正しいならば、彼の存命中に訛伝の歌語りが正式に勅撰集に入集されるとは考え難いから、やはり『後撰集』の伝える興範説が史実としては正しいのであろう。それでは好古説はどこから出て来たのか。

好古説が全く事実無根であるとするには、問題がある。私は『大和物語』の成立を円融初年の天禄年間（九七〇—三）頃と考えているが、^注好古はその直前の安和元年（九六八）まで生存しているわけであるから、全く付会の歌語りが流布定着するにはあまりに生存年代が近すぎるように思われるのである。事実誤認（特に中心人物に関して）の歌語りが定着するにはその人物の没後いくらかの時間の経過が必要だと思われるからである。こうなると、興範説が史実であるにもかかわらず、好古説も全く嘘ではないということになってしまう。

それでは、『大和物語』第二二六段の記事を今一度詳細に検討し

てみることにしよう。

最も注意すべきことは、好古が檢垣と会ったのは決して偶然ではないということである。彼は最初から「檢垣の御といひけむ人に、いかでははむ。いづくにかずむらむ」と、檢垣に会いたくて、供人の案内を便りに「それが家のありしわたりをたづね」まわっていたのである。すなわち、好古は筑紫に住む名高い風流人檢垣を尋ねて聞いて知っており、なんとかして会いたいと思っていたのである。この点で、既知の間柄であったとは思われるものの巡廻中たまたま檢垣に出会ったように読める『後撰集』の伝えとは著しく異なっている。檢垣はすでに「いとらうありおかしくて、世を経ける物」として都人の間にも有名であり、好古のような風流人にとっては、筑紫を訪れる機会があれば、ぜひ会ってみたいという気持ちを起こさせる存在であったのである（「檢垣の御」と敬称をつけて呼んでいることも、檢垣を慕う気持ちの表れとみられる）。

それは檢垣にまつわるさまざまな歌語りが当時（朱雀朝）の宮廷には広く流布していたためであろう。それらは『大和物語』第一二七段や第一二八段のような歌語りであり、また後に『後撰集』に採られることになる興範とのやりとりを語る歌語りでもあったろう。いや、好古はとりわけ興範とのエピソードに強い関心を持っていたに相違ない。

興範の大式在任時から約三〇年、まだ檢垣が健在である可能性はある。純友の乱を平定して心に余裕のできた好古は、風流心を起こして檢垣を捜しに出かけたのであろう。少なくともここまでは事実として十分ありうることなのである。

さて、檢垣の居所とおぼしきあたり（おそらく『後撰集』のいう

白河の地であらう）を訪れてみると、兵乱のためにすっかり荒れ果てていた。好古は檢垣の身の上を案じた。するとそこに「頭白き女」が水を汲んで運んでおり、彼ら一行の前を通過して粗末な造りの家にはいった。「これがあの檢垣の御ですよ」と告げられた好古は「いみじうあはれがり給て」供の者に呼ばせたが、檢垣は恥じて出て来ず、次のような歌を詠んだ。「むばたまのわが黒髪はしらかはのみつはくむまでなりにけるかな」。好古は感動し、着ていた柏一襲を脱いで檢垣に与えた。

この部分はどこまでが事実であるのか、実は疑わしい。かつて興範が檢垣に出会った時、檢垣の年齢を仮に四〇歳であったとすると、この時七〇歳、すでに「頭白き女」となっているのは自然である。したがって好古が檢垣と出会った可能性は十分にある。ただ、その時水を汲んでいたというのはどうか。これではあまりに興範の話と似すぎている。ただし、興範の場合は、彼の方から水を所望し、それに応じて檢垣は水を汲んで来たのであるのに対し、こちらは生活上の必要からいわば労働として水を汲んでいたのだから状況は異なる。たまたま水を汲んでいた所に出くわした可能性がないわけではない。

それでは、そこで檢垣の詠んだという歌はどうか。興範の時とはほとんど同じ歌である。わずかに初句と末句が異なるだけである（『大和物語』の伝本には末句「おいぞしにける」とあるものもあり、こちらはいっそう『後撰集』に近い）。この歌を詠んだのが事実だとすると、檢垣は好古に対して、三〇年前に興範に向かって詠んだ歌と同じ歌をちょっと歌句を変えて詠みかけたと解釈するしかない。あまりにもできすぎている感はあるが、水を汲んでいたところを好

古に見られたというのが事実であるならば、この旧作の再利用というのはいかにも検垣らしい臨機応変・当意即妙の受け答えだと言えるのではなからうか。しかも今回は本当に白髪のおやじになつてゐるわけであるから、「わが黒髪はしらかはの」云々というのも現実味を帯びてくる。場面に応じた古歌を利用して応答する例は、『枕草子』などにしばしば見えるところである。検垣はたまたま昔と同じような場面に遭遇したため、とっさに旧詠を再利用したのであらう。これこそ「らうありおかしくて、世を経」ていた検垣の面目躍如といふところである。

このように考えることもできるわけで、そうだとすれば極めて面白く、世の人がこれを歌語りとして喧伝し『大和物語』の作者も興味を抱き、『後撰集』に著名な興範との逸話がありながらもあえて好古の話を採録したというのも肯かれるのである。

ただ、やはりできすぎた話だといふ感はいなめない。もしこの話がすべて事実だとしたらこれほど面白いことはないが、実際にはそううまくはいかなからうと思ふ。この話にはやはりいくらかの虚構があると考えた方が自然であらう。先に述べたごとく、好古が検垣の居所を訪ねていったのは事実と認めてよからう。その時、兵乱によつて検垣の居所のあたりが荒廢していたのも事実だと思われる。そして、年齢関係から言つて、好古が年老いた検垣に出會つたことも十分ありうることであらう。しかし、その時検垣が水を汲んでいて、「むばたまの」の歌を詠んだという件になると、これは眉唾物である。このあたりは話を面白くするための虚構ではないかといふ気がする。

それではその虚構は誰の所為か。『大和物語』作者であらうか、

それとも不特定の歌語り享受者たちであらうか。否、私はどちらでもないと思ふ。この虚構は第三者によるものではなく、好古自身によるものであらうと思ふ。好古自身が検垣を訪ねて行つた時のエピソードとして虚構し、上落して都の風流人士に喧伝したのでないか。それは純友の乱を平定して凱旋し、武勇の誉を高くした好古にとつては、自らの風流人的側面を主張する嗜好の土産話だであらう。かつての大式興範と同様の体験を三〇年も経た後にきたという話はたちまち人々にもはやされたであらう。筑紫の老検垣は全くあずかり知らぬ話であつたにしても、風流人好古の名をいちやく高めるもとなつたに違ひない。のち天慶八年(九四五)と天徳四年(九六〇)の二度にわたつて大式に任命され、九州に赴任することになつたのも、あるいはこの歌語り喧伝の効果があつたのことも知れない。

以上のように、好古が検垣と関わりを持つたというのもある程度までは事実と考えることができるのである。いや、むしろ好古の話を全く嘘だとすることは困難なのであるからそう考えざるを得ないのである。『後撰集』編者は史実性を重んじて興範説のみを採用し、『大和物語』作者は当時世に喧伝されていた好古説の方を採録したといふわけなのである。この両書の伝えに関しては、こう考えるのが最も合理的であらうと思われれる。

四、『検垣編集』の成立

『検垣編集』が実は検垣の家集などではなく、後人による仮託の書であることは、すでに定説になつていふと云つてよい。その構造や成立事情に関しては、すでに多くのすぐれた論考があるが、ここ

では、それら先学の論考の驥尾に付して、私見により若干の補足と整理を試みてみたい。

『松垣軀集』は伝本により二九首、三二首、三三首と歌数に違いがあるが、これは歌の欠脱や増補によるもので、いずれの伝本も同一祖本に基づくと考えられている。ここでは、引用と歌番号は二九首を有する穂久河文庫蔵本を翻刻した『私家集大成』(昭四八明治書院)所収の本文によって論を進めることにする。

『松垣軀集』と銘打っているけれども、他文献によって松垣の歌と認められるのは、二三・二四番の二首と二五番の短連歌一首のみである。そのうち、二三番歌が、前項まで述べてきた『後撰集』や『大和物語』の歌とほぼ同じ歌なのである。引用してみよう。

おいきはめて、すみかもなうなりはて、てつからみつく
むきはになりて、おけをひきさけていつるにしも、くにの
かみかりしにいてらるゝみちにさしあひて、いかにかくは
なとみとかむるに、又人、それはたそとへは、なたかき
ひかきそといへは、ゝたかくるゝに、かくれところもなけ
れば、いかてかくなりしそとありしに、おもひつらひて
かくいふ

おいはてゝかしらのかみもしらかはのみつはくむまてなりにけるか

歌の初、二句が『後撰集』・『大和物語』両書と異なるほか、詞書の内容も両書ともに一致しない点が多い。まず、松垣と出会った人物が「くにのかみ」とある。これは巻頭歌の詞書を参照するに「きよはらのもとすけ」をさすと思われる。^(注1)清原元輔では、『後撰集』の興範、『大和物語』の好古の両者と異なるだけでなく、年代

的にもかなり後のことになってしまふ。元輔が肥後守に任じたのは寛和二年(九八六)正月のことであり(『三十六人歌仙伝』)、先の両者の伝えに関する考察から言つて、松垣がその頃まで生存していたといふことはまずありえない。したがって、元輔との交渉とすること自体、史実としてはとても信用できない。これは大方の論者の一致して認めるところである。

そして、国の守が狩りをしに出た時に、道の途中でたまたま出会ったというのであるが、偶然性という点では『後撰集』の伝えに近い。しかし、松垣が自ら水を汲んでいるところに行きあたったとする点、また供の者に尋ねて松垣であることを知らされた点、それを恥じて松垣が隠れようとした点などは『大和物語』に近い。最初の「すみかもなうなりはて、」云々というのも『大和物語』に近いが、それが純友の乱と関連付けられないところは異なっているし、恥じて家にはいったとする『大和物語』に対して、桶を川岸においてすわっていたという点も相違する。これでは『後撰集』・『大和物語』のいずれによつて記述しているのかは判断しかねる。むしろ両者の伝えを参照しつつ、歌集の前段からのつながりなどを考慮して独自にアレンジして記述したのではないかと思われる。すなわち、『松垣軀集』の編者は、世に名高い『後撰集』・『大和物語』の松垣説話を巧みに集中へ取り入れたのである。いや、それどころか、編者がこの集を編むことを思ひ出したのは、何と言つてもこの著名な伝承に興味を引かれていたためであつたに違いない。この歌が一篇の中心となるべき一首であると思われるのである。

ところで、『松垣軀集』は次の二四番歌以降、『大和物語』と一致する和歌群を連続して載せている。二四番歌は『大和物語』の第

一二七段、二五番の連歌が同じく第一二八段、この二首は『大和物語』で「檢垣の御」の歌とされていゝものである。二五番歌に続けて、穂久瀨文庫本では歌を欠くものの『大和物語』第二九段と一致すると見られる詞書を記し（他本は『大和物語』と同一歌を載せる）、二六番歌は続く第一三〇段と一致する。この二首は『大和物語』では「筑紫なりける女」が詠んだ歌であり、檢垣の歌とはされていないものである。以下二七番歌から二九番歌までは『大和物語』第一四一段に連続して見える歌で、「よしいるといひける宰相のはらから」が筑紫から連れて来た女の詠んだ歌である。これも本来檢垣とは関係のない歌と考えられる。

いちいち引用して比較対照はしないが、この部分に関しては、編者は明らかに『大和物語』によって記述を進めていることがわかる。もし逆に『大和物語』作者が『檢垣編集』から採って第一二七段以下を記述したと考えたならば、第二九段以下の詠者を「檢垣の御」とせず「筑紫なりける女」などとしていること、第一三〇段と第一四一段の間に一〇章段も『檢垣編集』と全く関係のない話をはさみこんでいることの説明がつかないからである。

ただし、直接『大和物語』に取材して記述されたのは第一二七段によつた「しかのねは」の歌（二四番歌）以下であつて、「おいはて」の歌（二三番歌）は先にも述べたごとく『大和物語』第一二六段から直接取材されたものではないことをここではっきりさせておかねばならない。二四番歌以下が『大和物語』の記事とほとんど逐語的に一致し、歌集の詞書らしく若干簡略化されただけのように見られるのに対し、二三番歌には、歌句の異同のみならず詞書にも随分相異点が多いことは先に述べた通りである。したがつて「オリ

ジナルなのは二三番までで、二三番以降は『大和物語』から採られたものである」とされる西丸妙子氏の意見はいささか不正確であり、二四番以降を『大和物語』から採録付加されたものと認められた山口博氏の説が妥当である。

ところで、その山口氏は『檢垣編集』の構造と成立時期について、次のように述べられた。すなわち、この集の本来の形態は二三番歌までであつて、一世紀の初頭から中頃にかけての成立、二四番歌以降はそれより後に『大和物語』によつて付加されたものであるというのである。全くその通りであると思う。

編者は有名な檢垣伝説を核にして、それを巻軸に置く形で家集をしたたのである。しかもその巻末の一首以外には檢垣の歌を採らず、すべて編者の自作歌か、それらしい古歌を利用して編纂したのである。『重之集』や『拾遺集』に見える歌（九番歌）をそのまま使つたり、『仲文集』の歌を焼き直した歌（一二番歌）を載せているほか、いかにも九州在住の遊女の歌らしい九州の地名をうまく詠み込んだ物名歌を博搜して編んでいるように思われる。

注目すべき事實は、編者は当然『大和物語』を見ていたと思われるのに、第一二七段・一二八段の歌は全く無視して『檢垣編集』を編んだことである。普通ならばこの二段の話は信頼すべき檢垣の歌として真つ先に集に採り入れてよきそうなのである。にもかかわらず、あえてそれをしなかつたのは、編者のこの歌集制作にあつたての方針であつたと思えない。編者は主たるモチーフとなつた二三番歌以外には檢垣本人の歌は一切採らないという方針で編纂を進めたのである。

ひとつの逸話や伝承、一首の和歌などに着想を得、想像力を逞し

くして一編の物語的歌集を創作するということは、知識人による一種の文芸的遊戯として、案外よく行なわれたものではあるまいか。たとえば『篁物語』（『小野篁集』とも呼ばれる）もそのような作品のひとつではなからうか。『篁物語』の前半は、明らかに「いもうとの身まかりにける時よみける」と詞書して『古今集』哀傷の巻頭に採られた「なく涙雨とふらなむわたり川水まさりなばかへりくるがに」という篁の歌をモチーフにして作られたものである。しかも「物語の歌ほとんど全部後人の仮作らしい」と山口博士が言われるように、実際の篁歌は一切採らず、すべて想像で作られた物語なのである。後半は、前半の内容を念頭に入れつつも、今度は「奉右大臣」という『本朝文粹』に採られて有名になった文章を主たるモチーフとして作られた続編である。『篁物語』編者の場合は（前半と後半は別人である可能性が強いと思われるが）モチーフとした歌や文章自体も作品中に採らないという姿勢であったのに対し、『検垣編集』編者の場合はモチーフとした歌を若干アレンジして巻尾に据えたところに違いはあるが、基本的には全く同様の姿勢で作られたものだと思われるのである。

こうした『検垣編集』編者の姿勢は「元輔という歌人を出しながら、編集には元輔の歌が一首もない」という山口氏の指摘によっても明らかであろう。自作の歌や古歌を巧みに配してそれらしい家集を仕立て上げるところに編纂の醍醐味があったのである。

ところが、『大和物語』第一二六段と同様の歌話が巻末にあったものだから、後人がさかしらをして、以下に『大和物語』の一連の章段を参照して歌を付加したのである。これはもともと編者の全く関知しない迷惑な増補と言わねばならないだろう。もっとも、二

三番歌の末尾が、一編の物語的家集の終末としてはいかにも尻切れとんぼであることは否めないから、後人の増補を誘うスキが編者の側にあったとも言うべきであろうけれど。

五、清原元輔登場の意味

さて最後に、『検垣編集』編者が冒頭から清原元輔を登場させ、巻尾の二三番歌に至るまで、あたかも副主人公のごとく扱っていることについて少し考えてみたい。

山口博士はその原因について次のように述べておられる。「根本的な原因は、元輔が肥後守となっている点にある。（中略）検垣が勅撰集に名をとどめているのは、後撰集だけである。後撰集の撰者中、九州に由縁あるのは元輔のみ、したがって、検垣と元輔という組み合わせが成り立ったのであろう」云々。まさにその通りであると思われる。ただ、私としてはもう少し踏みこんだ解釈をしてみたい気がする。

検垣の勅撰集入集は確かに『後撰集』の一首のみである。しかし、勅撰集以外に、検垣は『大和物語』の三章段に登場して詠歌しているのである。『検垣編集』編者の意識には、『後撰集』のみならず『大和物語』の方もほぼ同格か、むしろそれ以上の印象として存在していたであろう。『検垣編集』二三番歌の詞書は、どちらかと言うと『後撰集』よりも『大和物語』の方にやや近いことがそれを証していると思われる。

すなわち、編者が『検垣編集』の男主人公として、大式興範や野大式好古をさしおいて清原元輔を抜擢したというのは、『後撰集』のみならず検垣説話を載せるもうひとつの有力な文献である『大和

物語』にも元輔が大きな関わりを持っていたために容易に連想が働いたからではないかと思うのである。

私は『後撰集』との共通歌(話)を比較検討することから始めて考察を進め、『大和物語』の成立は従来言われていた天曆五年(九五)を下ること二〇年ほどの円融初年天祿年間(九七〇—九七三)頃、作者は『後撰集』の撰者たる梨壺の五人の内部に求められ、第一部(第一四六段まで)に關しては清原元輔が編纂した可能性が最も大きいということを種々の徴証を挙げて論じたことがある。^(注10)

もし『大和物語』の檢垣説話を含む部分が元輔の編になるものであるならば、『後撰集』と合わせて、元輔と檢垣説話の關係は実に密接になる。元輔が直接編纂に關つた両書に檢垣説話が載り、しかも元輔自身、後年ではあるが檢垣ゆかりの九州に国司として赴任したということになれば、元輔と言えば檢垣、檢垣と言えば元輔という連想がごく自然に生じてくるはずである。それゆえ、元輔は興範や好古を驅逐して『檢垣編集』の主人公におさまつたのである。

『無名草子』作者は元輔と檢垣との夫婦關係を当然のように認め、「檢垣の子、清少納言は」云々と書いてゐる。これは『檢垣編集』に記された元輔と檢垣との交渉から生じた伝説かも知れない。しかし、『檢垣編集』における檢垣は「いたくさかりすきたる」

(一番歌詞書)とか「としなとおいをとろへて、心ちのみつねにくるしくおほえてなやましきに」(五番歌詞書)とか、また「おとろへはて、ゆゝしけなる」(一〇番歌詞書)とか「おいきはめて」(二三番歌詞書)などと繰り返して老齡が強調されてゐる、これはおそらく、編者が着想の拠り所とした檢垣歌(二三番歌の原形)のイメージからことさらにデフォルメされた姿である(二三番歌の歌句自体、

『後撰集』や『大和物語』のそれと比べると、相当檢垣の老齡が強調されている)。また、二一番歌詞書に「われも人もおいにたり」云云とあるように、元輔の方もかなりの老人として描かれてゐる(實際、元輔の肥後守任官は七九歳の時であつた)。いわば老人同志の軽い戯れの交際という感が強いのであつて、『檢垣編集』の記事からはにわかにな二人が子をなすような關係とは考え難い。したがつて、清少納言を元輔と檢垣の子とする伝承は『檢垣編集』から直接發生したものでなく、もう少し若い二人の關係を想定した伝説があつて、それによつて理解されたものと考へた方がよいかも知れない。いずれにせよ、元輔と檢垣を關連づけることが極めて一般的であつたことを示す伝承と言えよう。

さて、『檢垣編集』の編者はいったい誰かということであるが、これは一一世紀前半頃に生きたある男性知識人であろうと思われる以上には判断のしようがない。山口博氏は、編者は悲劇的宿命に生きた階級の女性であると主張されたが、私には氏が説かれるほどシリアスな主題をこの作品が担つてゐると思はず、むしろ先に述べたように一首の歌からイメージをふくらませて一編の家集を仕立て上げるといふ知的遊戯らしく思われ、それは男性知識人の嗜好であろうと思ふ。

西丸妙子氏は編者に源重之を擬された^(注11)。興味深い見解ではあるが、少々疑問な点がある。重之は元輔とほぼ同時代人であつて、長保年間(九九九—一〇〇四)に陸奥国で没してゐる(『三十六人歌仙伝』)。伝えられるごとく、実方の陸奥守赴任に伴つて下向したまま彼地で没したとするならば、『檢垣編集』の成立は、実方が陸奥に出発した長徳元年(九九五)九月(『日本紀略』『権記』)以前

となる。元輔が没したのは永祚二年（九九〇）六月である（『三十六人歌仙伝』）から、没後わずかに五年のうちに書かれたとしなければならなくなる。西九氏の言われるごとく「元輔の死後まもなく」「追悼の意を込めて」書かれたとするなら五年間あれば十分であるが、やはり先に『大和物語』の好古説を否定しきれなかったのと同様、元輔の没後まもない時期にあればど虚構に満ちた作品が作られたとは考え難いのではないか。元輔を追悼する意をこめたにしては、彼の歌を一首も使わないのも不自然である。『桧垣羈集』は、『拾遺集』の成立後、おそくとも『袋草紙』の成った一二世紀中頃以前に『重之集』や『仲文集』（ともに同一歌や類歌を載せる）などを参照しつつ、桧垣説話に関心の強い何人かによって作られたと考えた方がよいように思われる。それに、あれほどの歌人である重之が作ったにしては、（現行の本文には転写上の乱れがあるにしても）詞書の文章は稚拙であるし、一編の構成もそれほどしっかりしているとは言えない。おそらく編者は、文芸的関心に比してその文才は今ひとつ勝れていなかった人物なのではなからうか。しかし、これ以上の判断は今のところつきかねる。

おわりに

桧垣に関する説話を『後撰集』から年代順に見ていくと、次第に老女であることが強調されていくことがわかる。『後撰集』では、歌句と作者名の「羈」の語を除けば、詞書には桧垣が老女であることは全く記されていない。『大和物語』になると「羈」の呼称は消える代わりに「頭白き女」と書かれる。この違いは両者の事件年次の三〇年ほどの隔たりから理解できた。『桧垣羈集』においては、

前述の通り相当デフォルメされた形で老齡が強調される。このあたりで桧垣「老殘の女のイメージが決定的になったようである。『袋草紙』雑談には「老後落魄者也」として『桧垣羈集』を引いている。桧垣説話は「白河のみづはぐむまで」の歌を中心に広く流布し、世阿弥の謡曲「桧垣」を経ていっそう有名になった。近世に至って、西鶴は「好色五人女」や「好色一代女」の趣向に桧垣説話を取り入れているといふ。

これほど著名な説話の主人公でありながら、桧垣という女性の実像はまだまだ厚いベールに覆われている。本稿は『後撰集』・『大和物語』両書の伝承に関してひとつの試解を提示し、『桧垣羈集』の成立について、これも拙い臆測を試みてみた。大方の御批正をお願いする次第である。

（昭和五九年七月稿）

〔注〕

1. 引用に際して、『後撰集』は杉谷寿郎編『天喜本後撰和歌集』（昭五四 笠間書院）の本文により、また『大和物語』は日本古典文学大系『竹取物語・伊勢物語・大和物語』（昭三二 岩波書店）の本文によった。『後撰集』の歌番号は『新編国歌大観』第一巻（昭五八 角川書店）の番号に一致する。旧『国歌大観』では二二〇番。
2. 『清少納言伝記攷』（昭一八 叡傍書房、増補改訂版昭三三 新生社）。
3. 「桧垣羈集論」『王朝歌壇の研究』村上冷泉（昭四二 桜楓社）所収。
4. 「大和物語評釈・三二 桧垣の御（上）」『国文学解題と教材の研究』

昭四〇・一。

5. 『大和物語の注釈と研究』（昭五六 武蔵野書院）三二四頁。

6. 「検垣嬭集考」『香椎瀉』第一五号（昭四四・九）。

7. 阿部猛氏、歴史新書『菅原道真』（昭五四 教育社）九八頁。

8. この点に関して詳しくは、拙稿「藤原仲文伝考」『国語国文』（昭五八・一一）参照。

9. 「八平安女流歌人の作風と生涯」『国文学研究』と『国文学研究』昭三四・三。

10. このあたりの純友の乱の経緯に関する記述は、坂本賞三先生、

日本の歴史6『摂関時代』（昭四九 小学館）を参照した。

11. 拙稿「『大和物語』成立試論——『後撰集』との関わりを通し

て——」『国文学放』第九五号（昭五七・九）参照。

12. 祐徳神社中川文庫蔵「ひかきのうは集」（京都大学国語国文資料

蔵書二二『検垣嬭集』八昭五五 臨川書店V所収）には、初一

句「むはたまのわかくろかみは」とあるが、これは『大和物語』

によって改変されたものであろう。

13. 工藤重短氏は、『検垣嬭集』全体の構成から、この「く」の

かみを元輔ではなく、「元輔帰京後の肥後国司某である」とさ

れた（『検垣嬭集解——非遊女家集のこと』（昭和四三）和歌文学とその周辺

（昭五九 桜楓社V所収）。注目すべき見解と思

われるが、今は一応元輔とする従来の通説に従っておく。なお、

この工藤論文は次の注14掲出西丸論文とともに検垣を遊女でない

とする立場で書かれた重要な論考である。今後さらに検討を深め

るべき課題であらう。

14. 「『検垣嬭集』成立考」『古代文化』昭五八・七。

15. 注3に同じ。

16. 「篁物語論」注3と同書所収。

17. 注3に同じ。

18. 同右。

19. 注11掲出拙稿および「円融朝初期頃における梨壺の五人——

『大和物語』作者想定への一階梯として——」『国文学放』第九

七号（昭五八・三）、「『大和物語』作者試論——清原元輔説の

可能性——」『国語と国文学』（昭五九・四）の拙稿参照。

20. 注3に同じ。

21. 注14に同じ。

22. 吉江久彌氏「『好色一代女』の成立に関する一つの解釈——謡

曲『検垣』との関連——」『国文学放』昭三五・五。

〔補注〕 興範の最初の大式在任中は、『延喜格』編纂時期と重

なっているから、この間どの程度九州に滞在していたかは疑問が

ある。

〔付記〕 脱稿後、稻賀敬二先生に御一読いただき、貴重な御教

示を数々賜った。本稿にはその一部しか反映させることができな

かったが、今後の課題として、御芳情に感謝申し上げる次第で

ある。

—— 広島大学文学部助手 ——